

令和 2 年 5 月 18 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02589

研究課題名(和文)「粗悪本」を中心とした中国通俗小説の出版および受容に関する研究

研究課題名(英文) Research on the Publication and Reception of the Poor Quality book from the Chinese Popular Novels

研究代表者

川島 優子 (KAWASHIMA, YUKO)

広島大学・文学研究科・教授

研究者番号：30440879

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、これまでほとんど顧みられることのなかった「粗悪本」に光を当てることで、日本における中国通俗小説の受容について、また中国通俗小説の出版に関する問題について考えるべく、国内に所蔵される中国通俗小説、特に明清時代に作られた『金瓶梅』の刊本について調査を行った。その結果、「第一奇書本」については、様々なバージョンが存在するものの、いくつかの系統に整理しうることを、一方で龍谷大学図書館写字台文庫蔵本のような「つぎはぎ」されたテキストが存在することが明らかとなった。さらに調査の過程で浮上した問題として、こうした版本につけられる「批評」についても、初歩的な考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、日本国内に所蔵される様々な『金瓶梅』について、基本的な調査と整理を行うことができた。特に龍谷大学図書館写字台文庫蔵本については、今後様々な研究において示唆的なものとなりうる。また、特に「粗悪本」ともいふべき版本の調査を行う中で、通俗小説に付けられる「批評」の重要性にも改めて気づかされた。いかに刷りの状態が悪くとも、通俗小説は基本的には「評点付き」で紙面が構成されているのである。この問題については今後引き続き研究を進める予定である。

研究成果の概要(英文)： This research looks into the “poor quality book” that has been lacking attentions from researchers thus far. It particularly examines the publications and reception of the Chinese popular novels (especially Jin Ping Mei of the Ming Qing dynasty) that have long been collected and well kept within Japan.

The key findings of this research demonstrate: The Di Yi Qi Shu edition of Jin Ping Mei seems to have many versions, however, they can be classified into a certain group. This research also discovered that in Japan, there existed an assembled version by Sha Ji Dai Collection of Ryukoku University Library. Furthermore, the author has conducted preliminary research for the critical comments that were attached to this particular above-mentioned assembled version.

研究分野：中国古典文学

キーワード：中国通俗小説 金瓶梅 第一奇書本 粗悪本 批評 日本における受容

1. 研究開始当初の背景

中国から日本へやってきた文学作品は、必ずしもすべてがその本来の目的である「文学作品として読まれる」かたちで受容されていたわけではない。報告者は、中国通俗文学、特に『金瓶梅』を中心とした長編白話小説の江戸時代における受容について調査、考察を行ってきた。その結果、中国の白話小説は純粋な文学作品として読まれていただけでなく、様々な「資料」（博物資料や医学資料、語学学習資料等）としても読まれていたことが明らかとなった。しかし調査の過程で、もはや「読まれる」こと自体を目的としていたとは思えないかたちの書物の存在も浮かび上がってきた。そこで、これまでほとんど顧みられることのなかった「粗悪本」に目を向けることにより、日本における中国通俗小説あるいは漢籍そのものの受容について、また中国通俗小説の出版問題について、従来とは異なる視点から考えるための基礎的な研究を行うこととした。

中国通俗小説の目録については、孫楷第『中国通俗小説書目』（1933、その後1957と1982に改訂版が刊行）、大塚秀高『増補 中国通俗小説書目』（1987）などがあり、特に日本における漢籍の所蔵状況については、嚴紹盪『日藏漢籍善本書録』（2007）に整理されている。これらの先行研究からは、中国では失われた数々の書物、それも善本が、保存状態のよい形で数多く日本に残されていることがよくわかる。『金瓶梅』でいえば、最古の版本である「詞話本」がそうである。同じく明代の短編白話小説集『拍案驚奇』についても、最も古い尚友堂刊本は日本にしか存在しておらず（日光山輪王寺、広島大学）、唐代小説「遊仙窟」のように、中国では長らく佚書であったものが、日本では奈良時代に伝来して以降珍重され、清代になって逆輸入されるという例もある。中国からやってきた書物が、日本では中国本土以上に珍重されていたことが窺える。とりわけ通俗小説については、中国と日本とで扱われ方が異なっているようである。

しかし一方で、これまでほとんど注目されることのなかった「粗悪本」が存在していることも事実である。たとえば西本願寺歴代宗主のコレクションである龍谷大学大宮図書館写字台文庫には、「金瓶梅」と題される版本が収められているが（以下「写字台本」とする）、刷りは悪く、ズレやにじみがひどい頁も多い。さらに、本来あるべき分量の十分の一ほどしかない端本であり、書籍の体は為しているものの到底読める代物ではない。もっといえば、読まれることを想定して作られたとは思えないのである。写字台本がいつ頃どこで作られたのかは現在のところ不明であるが、報告者は、あるいは最初から「読まれるもの」としてではなく、「所有されるもの」として作られた可能性もあるのではないかと考えるに至った。

たとえば清末に刊行された『三国志演義』（毛評本）のうち、江蘇、山東、広東といった沿岸部で作られた刊本に関しては、地元に残っている率が極めて低く、とりわけ広州の維経堂という書肆の刊本について言えば、現存している十二点の刊本はすべて日本にあるという（上田望「毛綸、毛宗崗批評『四大奇書三国志演義』と清代の出版文化」『東方学』101,2001）。維経堂で作られた刊本については、清代の長編小説『紅樓夢』も日本に大量に流入しているが、誤字脱字が多く、刷りも装丁も悪い。森中美樹氏の報告に拠れば、この維経堂版『紅樓夢』は東京外国語学校の語学教材として用いられており、またこの刊本が中国国内では確認できないことなどから、維経堂は輸出を専門とした書肆だったのではないかという（「維経堂蔵版『繡像紅樓夢』とその流入について」中国古典小説研究会関西例会2015年2月4日発表）。海外への輸出を専門とする出版業者が存在し、そこで作られていた刊本の中に出来のよろしくないもの（出来の悪さの程度に相当な差はあるものの）が含まれていたとすれば、先述の写字台本も、あるいは輸出用に作られたものが将来され、西本願寺に寄進された可能性がある。国外（主に日本）向けの「粗悪本」が作られるということは、中国国内とは異なる需要（マーケット）が日本に存在していたことを意味する。「粗悪本」を通して見ることで、中国の出版に関する問題、あるいは日本における中

国通俗小説受容の、新たな側面が浮かび上がってくる可能性があるのである。『金瓶梅』最古の版本である「詞話本」のうち、報告者が現物を確認し得た「台北故宮博物院蔵本」「徳山毛利家蔵本」について、前者には全体を通して実に様々な書き入れが見られるのに対し、後者は第一、二冊以降、ほとんど読まれた形跡がなく、見事な桐の箱に収められ、美術品のごとき扱いであったこととも、相通しているように思われる。

2. 研究の目的

本研究は、日本国内に所蔵される『金瓶梅』を中心とした中国通俗小説の刊本について網羅的な調査を行い、これまで顧みられることのなかった「粗悪本」を通して、中国通俗小説あるいは漢籍そのものの受容について、また中国通俗小説の出版問題について、従来とは異なる視点からの考察を行うための基礎的な資料を整理することを目的とする。具体的に、以下の項目に取り組むこととした。

(1) 日本国内に現存する『金瓶梅』について、網羅的な調査を行う。上記の先行目録に取り上げられるのは基本的に「善本」であり、写字台本のような「粗悪本」は取り上げられていない。日本における『金瓶梅』の所蔵状況については、澤田瑞穂主編『増修 金瓶梅研究資料要覧』(1981)に整理されているが、「第一奇書本」に関しては刊本が多岐にわたるとの理由から、代表的なものや閲覧しやすいのみが採録されるにとどまっている。本研究では、むしろこうした目録では取り上げられることのなかった「粗悪本」の存在を、まず明らかにする必要がある。本研究で特に『金瓶梅』を取り上げる理由としては、申請者の従来の研究成果を利用しやすいという点も勿論あるが、他の長編白話小説に比べると『金瓶梅』は版本の系統も少なく、流通の状況も現実的に整理可能な範囲にあり、サンプルとして適切だと判断できるからでもある。

(2) 龍谷大学大宮図書館写字台文庫に収められる「金瓶梅」は、先述のとおり「粗悪本」である。しかしそうであるが故に、この書は本研究において格好の資料となりうる。そこで写字台文庫に関する資料、同文庫所蔵の他の書物をも参照しつつ、この書について調査を行う。

(3) 以上を踏まえ、中国国内、あるいは日本以外の国にもこうした「粗悪本」が存在するのかどうかについて、可能であれば調査を行う。かりに中国国内には存在していないとすれば、国外輸出向けに「粗悪本」が作られたという可能性が色濃くなるが(勿論、現存していないだけであつては存在していた可能性もある)、では日本以外の国にも存在しているのか、存在しているとすれば中国から直接輸入されたものなのか、あるいは日本を経由して輸入されたものなのか等、総合的に検討する必要がある。

3. 研究の方法

上述の目的に従い、以下の手順で研究を進めることとした。

(1) 先述の通り、日本における漢籍の所蔵状況については、巖紹鑾『日蔵漢籍善本書録』(2007)に整理されており、特に『金瓶梅』の刊本については、澤田瑞穂主編『増修 金瓶梅研究資料要覧』(1981)に整理されているが、いずれも基本的には善本を対象としていること、その後インターネット環境の整備等により各所蔵機関の蔵書整理、公開が進み、これまで知られていなかった書物の存在が明らかになりつつあることなどから、日本国内における『金瓶梅』の所蔵状況を網羅的に調査する。

(2) 西本願寺歴代宗主のコレクションである龍谷大学図書館写字台文庫に収められる「金瓶梅」について、詳細な調査を行う。

(3) 国外の「粗悪本」所蔵状況について調査を行う。たとえば、上述した輸出専門書肆維経

堂板の『明心宝鑑』は、ハーバード大学燕京研究所でも所蔵が確認されているが、清末の広州から直接アメリカに渡ったのではなく、一旦日本に輸入されたものがアメリカに渡った可能性もある。清代に存在した輸出専門の書肆がどのようなマーケットを想定して活動を行っていたのかを、「粗悪本」の所蔵状況、流通ルートを調査することで明らかにしたい。その際、中国国内の所蔵状況についても調査を進め、かりに存在が確認できたとしても、後に日本から逆輸入された可能性はないのか、あるいは存在が確認できなかったとしても、かつては存在していたものが後に失われた可能性はないのか等、様々な可能性を考慮する必要がある。

4. 研究成果

明清時代に作られた刊本を中心とした日本国内に現存する『金瓶梅』については、目録やインターネット上のデータベースの他、各機関のHP、窓口等を通して予備調査を行った。その上で、インターネットで画像が公開されているもの、されていないものに分けて調査を行った。後者については、京都大学附属図書館、天理図書館、東京大学東洋文化研究所、東京大学附属図書館、公文書館、東洋文庫、静嘉堂文庫、慶応大学附属図書館、東京都立図書館等での現物調査を行った。その結果、従来あまり重視されてこなかった通行本「第一奇書本」の版本については、様々なバージョンがあるものの、いくつかの系統に整理されうること、第一奇書本に付けられる張竹坡の評が、テキストによって一様ではないことが明らかとなった。

特に調査の過程で、小説に付けられる「批評」の重要性に改めて気づかされることとなった。いかに版木の状態が悪く、刷りが不鮮明であったとしても、基本的には評点付きで紙面が構成されているのである。版木の摩滅等によって文字がつぶれやすい批評は真っ先に削られてもおかしくはなく、批評がない方が読みやすいようにも思われる（実際、清末民初の石印本になると批評はカットされるようになる）。しかし小説はあくまで「評点込み」で一つの世界を構成しているのである。そこで、本来の目的からは逸れることとなってしまったが、小説、あるいは明代に作られた書物に付けられた評点について考察を行った。通俗小説における批評については、今後引き続き研究を進める予定である。

龍谷大学図書館写字台文庫に収められる「金瓶梅」については、それが第一奇書本系統であること、その中でも影松軒刊本である国会図書館蔵本、早稲田大学蔵本と基本的には同版であること、しかし一部に覆刻された跡が確認でき、また補刻されたとおぼしき葉も相当数確認できること、さらに現存する回についても欠葉が見られることが指摘できた。このような『金瓶梅』の粗本がいつ頃どのような経緯で写字台文庫に収められるに至ったのかについては、複数の文献に当たったものの、今回の調査では明らかにしえなかった。しかし補刻葉の中で、国会図書館蔵本および早稲田大学蔵本とは異同が認められる文字が、東京大学東洋文化研究所蔵本もしくは京都大学図書館蔵本の文字と一致するなど、写字台本が様々な版本の「寄せ集め」といった様を呈していることが明らかとなった。

一方、国内の所蔵機関を訪問して一点一点調査を行うに当たって、想定以上の時間がかかったこと、上記の派生した研究を行ったこともあり、国外の「粗悪本」の所蔵状況については調査が及ばなかった。

これらの研究成果を含むものとして、平成30年度科学研究費・研究成果公開促進費（学術図書）を受け、『『金瓶梅』の構想とその受容』（研文出版、全384頁、2019年）を公刊した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 川島優子	4. 巻 73
2. 論文標題 明代金瓶梅資料訳注稿（その三）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国中世文学研究	6. 最初と最後の頁 106-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川島優子	4. 巻 15
2. 論文標題 The Edo Period's Jin Ping Mei	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 表現技術研究	6. 最初と最後の頁 36-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川島優子	4. 巻 72
2. 論文標題 明代金瓶梅資料訳注稿（その二）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国中世文学研究	6. 最初と最後の頁 48-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川島優子	4. 巻 -
2. 論文標題 明治・大正期の『金瓶梅』 三種の訳本を中心として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『佐藤利行教授還暦記念 日中比較文化論集』（白帝社）	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川島優子	4. 巻 136
2. 論文標題 容与堂刊『李卓吾先生批評忠義水滸伝』の評語に関する考察 「画」を中心として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東方学	6. 最初と最後の頁 40-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川島優子	4. 巻 71
2. 論文標題 明代金瓶梅資料訳注稿 (その一)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国中世文学研究	6. 最初と最後の頁 69-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川島優子	4. 巻 35
2. 論文標題 龍谷大学図書館写字台文庫蔵『金瓶梅』について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中国学研究論集	6. 最初と最後の頁 63-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 川島優子
2. 発表標題 明代の『文選』 凌濛初編『合評選詩』を中心として
3. 学会等名 日本中国学会 (次世代シンポジウム)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 川島優子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 研文出版	5. 総ページ数 306
3. 書名 『金瓶梅』の構想とその受容	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----